

なぜ聖公会なの？

川口基督教会牧師 司祭 ステパノ 柳 時京

アメリカ聖公会の信徒で、ラトガース大学の英文学教授であるルーイ・クル氏が編纂した本の英語の原題は「One Hundred and one reasons to be Episcopalian」という変わったタイトルですが、直訳すれば「聖公会の信徒であり続ける 101 の理由」でしょうか。ご存知の通り、アメリカはキリスト教国家と言っても過言でないほど、多種多様なキリスト教教派を有しています。そういう中で、聖公会のメンバーであり続けるには、それなりの理由があるというのが、この本の編纂に当たった背景です。

掲載された文章の書き手らは、とても有名な人もいれば、そうでない人もいます。編者は、聖公会の信徒である理由として、例えば「美しい祈祷=礼拝、受け入れの寛容性、聖書・伝統・理性の三つに頼る特性」などを挙げています。そして、101 の文章は「時には面白く痛切で、いつも示唆に富む」もので、聖公会の長所を明確に表していると、紹介しています。

その中の一つ、まず 19 番目のワイオミング教区のマリリン J. イングストロム司祭の文章を紹介します。

「私たちは濃厚な礼拝を行っている。お辞儀をする、ひざまずく、座る、立つ、抱きしめる、歩く、時には両手を上げる、泣く、笑う、歌う、叫ぶ、口笛する、嗅ぐ、味見する、感じる、触る、取る、見る、見つめるなどなど。」確かに聖公会の一連の礼拝の中には、この司祭の言うようなあらゆる要素が含まれており、言葉通り濃厚です。

もう一つは、ニュージャージー教区のエリザベス R・ゲイツ司祭が書いた 3 番目の文章「聖公会は、イエスはただ励むよりはチャレンジするために、現状維持ではなく変革するために、裁くよりは愛するために、投げ捨てるより包容するために来られたことを私に教えてくれた教会は、ある一部の教派のようにむやみに慰めや励ましのみを強調するのではなく、また惰性に陥った頑なな組織でもなく、柔軟性をもつ未来志向の共同体であるべきです。

ここまで来ると 101 番目の文章が気になります。「聖公会のメンバーは、何もたやすく変えようとせず、鉄壁のような習慣を形成する。彼らは他の教派の人々の信仰や行動との比較は辞さないものの、聖公会の習慣に安定的に落ち着く。大事なものは、毎年続くそのような習慣が、祈祷書と聖書の言葉と、イエスの物語に命を吹き込むということだ。毎週の聖餐式の習慣は人生を特別なものにする。」ワシントン教区の信徒ロレン B. ミードさんの洞察です。

来年で宣教開始から 150 周年を迎える川口基督教会は、歴とした聖公会の教会です。私は上で紹介した本のタイトルを、次のように書き換えてみたらと思います。「なぜ私は川口基督教会の信徒であり続けるのか」。その理由を、皆で話し合いながら 101 まで書き出してみてもどうでしょうか。それはまた、これからも私たちがここ川口の地で教会として有り続ける理由でもあるでしょう。